

自著解題

桜井哲夫

はじめに

私が東経大に赴任したのは、1981年4月である。以来2018年3月まで37年間勤務した期間に出版できた私の著作23冊について、退職にあたってまとめておきたいと考えた。そのため、2018年1月22日の最終講義の際に、来場者に「著作解題」として配布した。今回は、東経大時代、私の著作がいかにか書かれたかを記録として残しておきたいと思い、1月22日に配布した「著作解題」に加筆した。さらに出版当時のメディアでの批評・記事も記録しておくことにした。

1、『知識人の運命——主体の再生に向けて』（三一書房、1983年）

最初の著書である。中身は、既出の6本の論文と書き下ろしの序章という構成だった。大学院生時代に書いた論文5本（『思想』（岩波書店）掲載2本、『現代思想』（青土社）掲載1本、『社会思想史研究』（社会思想史学会誌）掲載論文1本、歴史学研究会大会報告書（青木書店）掲載論文1本）、広島大学助手時代に書いた『思想』掲載の論文1本。東経大に赴任してから書いた『中央公論』掲載論文1本（「戦後知識人の解体」。これは、1950年代から60年代にかけての「大衆社会論争」を再評価した論考で、忘れさられていた加藤秀俊の「中間文化論」を再評価した）に書き下ろしの序章を加えた。

東経大に赴任直前、広島大学助手だったときに、大学院生のころから声をかけてもらっていた『中央公論』の編集者にもちこんで、400字詰め100枚の長編論考を1981年2月号に巻頭論文「知の位階制～文化ブルジョワジーの勃興」として掲載してもらった。それを読んだ三一書房編集者からの依頼によって論文集を編んだ。

★書評：清水正徳「〈現代に生きる人間〉の真諦を凝視する労作」『週刊読書人』1983年5月16日（9日合併）号

評者名なし「近代市民社会の制度を問う」『日本読書新聞』1983年5月16日号

天野恵一「テクノクラート時代に抗し」『図書新聞』1983年5月28日号

自著解題

2、『近代』の意味——制度としての学校・工場』（日本放送出版協会 [NHK ブックス], 1984年)

『ことばを失った若者たち』と並んで、大学入試・予備校模試等で利用されることの多い本である。近代社会における「学校制度」や「工場制度」の成立が何をもたらしたのかを究明しようとしたものである。未だに、予備校模試での国語での出題が多く、毎年許諾をもとめる連絡が入る。これは、やはり『中央公論』論文などを読んだNHK ブックスの編集者からの依頼によるもので初めての書き下ろしだった。当時は、ワープロもパソコンもない時代で、すべて原稿用紙に鉛筆で書くため、筆圧が強い私は、腕をいためて大変だった。ベストセラーとまでは言えないが、10数年にわたって版を重ねたロングセラーとなった。

★書評・インタビュー：

「著書の周辺・桜井哲夫さんの『近代の意味』」、『毎日新聞』1985年1月21日付

呉智英「最良の入門書」『図書新聞』1985年3月2日号

宮島喬「西欧近代の批判的とらえ返し」『週刊読書人』1985年4月8日号

短評：『読売新聞』1985年1月28日、『週刊エコノミスト』2月12日号

3、『ことばを失った若者たち』（講談社現代新書、1985年）

約20万部の売り上げを記録し、私の著作で最大のベストセラーである。『中央公論』1983年9月号に掲載された村上春樹などを論じた若者論（「思い入れからの逃走」、村上は今時まだ知る人も少ないマイナーな作家だった。社会学者としては私が初めて論じた）を読んだ、今は亡き講談社の名編集者Wさん（学術局長を経て取締役。歌人としても知られた）から、声をかけられて書いた初めての一般向け著作。その時に、その編集者からぜひ紹介してほしいと言われ、今村仁司教授を紹介した。その結果、私の橋渡しで、『現代思想のキーワード』が出されることになった。その刊行が1985年9月と決められてしまい、ならば私の本も同時に刊行と一方的に決められてしまった。

執筆に大変焦って、原稿が完成したのが、7月。原稿完成から2ヵ月で刊行したという講談社ならでの早業（最大手だから可能だった）だったのを思い出す。

「コミュニケーション障害」などという概念もなかった時代に、「対立の排除」という概念を使って、世代間のコミュニケーション対立を分析した先駆的な本だと言っていいと思う。60年代の日本の学生反乱の深層分析としては、現在まで私の本の構図を越えた理論的分析はないと考えている。

また、この本の中で誇っていいことの一つは、当時まだまともな評価もされていなかった虫プロのマンガ雑誌『COM』を紹介し、研究者としては、おそらく初めて評価したことだ。

★書評・インタビュー：

「著者と一時間」『朝日新聞』1985年10月14日付

評者名なし「その陰の部分で……」『毎日新聞』10月21日付

三橋治「子供の消滅 社会の急激な変化によって」『週刊読書人』12月2日号

インタビュー「デジタル世代が日本的経営を崩壊させる」『月刊リクルート』1985年12月号

評者(弘貴)「地獄耳・ことばを失った若者たち」『情報春秋』1985年12月20日号

短評：『エコノミスト』1985年12月3日号

インタビュー記事「今のままでは家族が崩壊してしまう」『ソフィア』(講談社)1986年2月号

4、『家族のミトロジー』(新曜社, 1986年)

『中央公論』誌に文芸・映画批評家の川本三郎氏と隔月で連載していた文化批評を6本、それに「家族」論の論考を一本、さらに序章に家族の歴史を書き下ろし、「青年」論と「子ども」論、「女性」論などの論文をまとめた家族論集。この本を出すとき、夏休み期間に持病のアトピー性皮膚炎が悪化して大学病院に入院していたので、記憶に鮮明である。これに入れた「近代家族のなかの『青年』」(初出は『現代思想』誌)が、神戸女学院大学の国語の入試問題として全文が出されたときは驚いた。入試が終わってから、神戸女学院大学から入試問題と一緒に神戸のクッキー詰め合わせが送られてきたのには、本当にびっくりした。入試の国語問題にはいろいろと私の文章は使われたけれども、礼状だけが普通で、贈り物が贈られてきたのは最初で最後だった。さすが神戸女学院らしい礼儀正しきだと感じた。

★書評：

評者名なし：共同通信配信「学門的な方向示す」『中国新聞』1986年11月2日付ほか。

評者名なし「あてどない漂流・・・」『毎日新聞』1986年11月17日付

谷谷規子「世紀末の暗雲を示唆」『東京新聞』1986年11月17日付

管孝行「感情をまじえずに対象とむきあう」『朝日ジャーナル』1986年12月5日号

江原由美子「政治・社会・文化との関連性から論じる」『日本経済新聞』1987年1月11日付

短評：『読売新聞』1986年11月11日付、『朝日新聞』1986年12月8日付、『エコノミスト』1986年11月25日号、『こころの科学』第11号(1987年1月)、『広告』(博報堂)1987年1・2月号

折原脩三「父性埋没と言語解体を家族神話から解析」『週刊ポスト』1987年1月30日号

5、『思想としての60年代』(講談社, 1988年／のち、ちくま学芸文庫, 1993年)

『ことばを失った若者たち』がヒットしたので、担当編集者(新書編集部のW部長)が編集長もつとめていた講談社のPR雑誌『本』に連載を頼まれた。1960年代を回顧する「The

自著解題

60's again」と題した連載を1年間したあと、一冊にまとめた本である。連載中に吉本隆明批判の回のあと、吉本氏に彼の雑誌『試行』で「桜井哲夫というチンピラが」と罵倒されて、「あの吉本を怒らせた」と編集者のWさん共々喜んでしまった。また「甘えの構造」批判をしたので、『本』誌上で高名な精神科医の土居健郎氏との論争が生じた。連載が終わったあと、私は海外研究員としてフランスに旅立っていた。そのため土居さんへの反論は、ネットのない時代だから、パリのアパートからfaxで送ったことを思い出す。当時出てきた日本語ワープロ（シャープの書院）で原稿を書くようになっていたので、重いワープロをパリまで持っていったのである。

★書評：

笠井潔「〈生〉の出発点を多面的に検証」『産経新聞』1988年7月14日付

広岡守穂「精神形成史通し時代の特徴掘下げ」『公明新聞』1988年8月22日付

時事通信配信「現況の違和感を吐露」『北日本新聞』7月11日付ほか。

短評『毎日新聞』7月25日付、『読売新聞』8月1日付

小坂修平「〈時代〉を語る難しさ」『週刊読書人』10月3日号

川本三郎「オールラウンド川本通信」『ダ・カーポ』8月17日号

ロジャー・パルバース「パルバースが読む」『産経新聞』8月31日付夕刊

6、『サン・イヴ街からの眺め——フランス社会ウォッチング』（岩波書店、1989年／のち、ちくま学芸文庫、1993年）

すでに世界的に著名だった社会学者ピエール・ブルデュー教授の許可を得て、パリの社会科学高等研究院に、客員研究員として在籍させてもらったのが、1988年3月から1989年3月までの一年間である。家族連れ（妻と出発当時2歳半の娘）でのパリ暮らしだったので、様々な体験をした。アパートは、今村仁司教授つながりで、早稲田大学の塚原史さん（ダダイズムやシュールレアリズムの研究者・ジャン・ボードリヤールの翻訳でも知られる）の一家が住んでいたパリの下町アパートをそのまま引き継いだ。家財道具をそのまま使えたのはラッキーであった。日本人の企業駐在員が住んでいる高級アパート地区ではなく、お隣さんがアラブ系住民の普通のアパートで暮らした。

いろいろな日常生活でのドタバタ騒ぎがあった。またフランスでこんなにも毎日のように日本製アニメが放送されていて大人気だなどとは知らなかったのが、ビックリして興味を感じていろいろと雑誌などの記事を集め始めた。また帰国直前、昭和天皇が崩御し、フランスでも日本の異様な自粛ムードに関心が集まった。そして手塚治虫の急逝。個人的には、こちらのほうに大きなショックを感じた。そして一年間の滞在を終えて、日本に戻り、滞在記を書こうと思いついた。それまでの気取った滞在記ではなく、パリの日常に密着したものを書こうと思った。日本アニメのヨーロッパでの隆盛について詳しく書いたのは、たぶん私が最

初だと思う。

最初は、前から誘いをうけていた出版社で出そうと思い、了解を得て、7月に書き上げたものを見せたところ、どうやら社長なのか幹部なのか、内容が気に入らないらしい。そっちが気に入らないなら、出しませんと言ったものの、はてどこへ持っていこうかと迷った。そこで講談社の例のW部長に相談した。すると、ウチで出してもいいが、同じ出版社ばかりというのも、どうだろう、と言われ、岩波書店の編集者Sさんを紹介してもらった。会ったところ、彼は昔『現代思想』の編集部にて、大学院院生時代の私が最初に『現代思想』に掲載してもらった論文原稿を御茶ノ水駅近くの喫茶店で手渡した本人だった。

なんと偶然！ とんとん拍子に話がすすみ、その年の12月に刊行された。刊行直後、Sさんから電話があり、私の本が、12月に出した本のなかで、会長本人が届ける一冊に選ばれたというのだ。仰天した。思わずえっ、と絶句した。何でも岩波書店では、会長自身が著者に本を届けるという慣習があるのだそう。まさか、自宅に岩波書店の会長が来るなんて恐れ多いので、私のほうが会長に会いに行くことにして、岩波書店の会長室で岩波雄二郎会長（当時70歳）としばらく歓談した。不思議な体験であった。

★書評・インタビュー：

著者訪問（インタビュー）共同通信配信「フランスの素顔を紹介」『北海道新聞』1990年1月15日付、『西日本新聞』『徳島新聞』ほか。

評者・中条省平『マリークレール日本版』1990年4月号

宇波彰「新進社会学者が描く現代フランス社会とジャーナリズムの実情」『女性セブン』1990年6月21日号

桑田禮彰「体験と情報を活用しながら書かれたフランス社会案内」『週刊読書人』1990年2月26日号

7、『手塚治虫——時代と切り結ぶ表現者』（講談社現代新書、1990年）

さて、日本に帰国してから、講談社の例のW部長から呼び出しされた。何かと思ったら、来年6月で講談社現代新書の1000冊突破記念として新書10冊を一挙に刊行する企画があるので、お前も一冊書けという。そこで、手塚の死にショックをおぼえていたので、手塚の評伝を書きたいと伝えた。それからしばらくして、どーんと、講談社版手塚治虫全集300冊が自宅に届いたので仰天した。書くことは決まりになっていたのである。そのころは、『サン・イヴ街』を鋭意執筆中（原稿を書き上げたのが7月）で、何も準備していない。夏から秋にかけては、その本の修正やらゲラの校正に追われ、手塚本は大丈夫なのかと我ながら心配だった。

このとき、1960年代に出された『COM』や『ガロ』といった雑誌を所蔵し続けていたことが役に立った。大宅文庫に通い、手塚関係の記事をあさってコピーし、全集を逐一読み通

自著解題

した。年末年始もなく、執筆作業をし続けて、やっと3月に脱稿し、6月に刊行。幸いなことに、高い評価（呉智英氏から、これからの研究の基礎となるべき本格的伝記だと言われた）を得て売れ行きも好調で、10万部ほど売れた。この本がきっかけで、1991年2月11～14日に連続4日間放送されたNHK教育TVの「NHKセミナー 20世紀の群像 手塚治虫」に出演し、手塚の生涯と作品を語らせてもらった（手塚治虫がマンガを描いていた新座市の手塚プロの現場で2日間の映像収録が行われた）。

★書評：

呉智英「本格的コミック評：大喜！ 今後の手塚治虫論の基本になる作品が、やっと刊行された」『週刊宝石』1990年8月16日号

佐藤忠男「漫画界の天才ができあがるまで」『週刊朝日』1990年8月10日号

書評「手塚治虫」『経済往来』1990年8月号

村上知彦「まんがははまだ、差別と偏見のただ中にある」『COMIC BOX』1990年10月号

白井佳夫「作品と時代状況リンクし全貌浮き彫り」『公明新聞』1990年8月20日付

評者名なし：共同通信配信記事『信濃毎日新聞』1990年7月11日付、『神奈川新聞』1990年7月15日付ほか

根井輝雄記者「豊富な資料用いて解説」『西日本新聞』1990年7月15日付

8、『メシアニズムの終焉——社会主義とは何であったのか』（筑摩書房、1991年）

増補改題『社会主義の終焉——マルクス主義と現代』（講談社学術文庫、1997年）

しばしば、何が専門ですか、と聞かれるが、実は、この本が、私の専門のテーマである。学生時代から社会主義思想史に関心があった。19世紀に生きたマルクスが想定していなかったロシア革命。20世紀初めにロシア革命が起こり、20世紀政治に多大の影響を与える。世界中の若者を動員したあの運動はなんだったのか、とずっと考え続けてきた。

パリに1年間滞在したときも、パリの国立図書館で資料をせっせと集めた。産業化のなかで、旧来の共同体が崩壊し、市場経済の進展で貧富の格差が増大し（今も同じ現象がある）、人と人とのコミュニケーションが崩壊する中で、新しい共同体構築運動として、ヨーロッパに初期社会主義が生まれた。米国社会と共産主義は全く別物と思っている人たちは、かつて19世紀において、米国では、ヨーロッパから移入してきたさまざまなコミュニズム（共同体）主義（コミュニズム）運動が起こっていたことを知らないだろう。米国のコミュニズム運動（コミュニズム）は、若者文化（ヒッピー文化）として1960年代に再興する。共産主義という日本での訳語が、本来の意味を見失わせている。

そうした運動を研究していて、この運動がある種の宗教性を持っていたことに気づいた。その中で、サン＝シモンという思想家の知識層を主体とした「救世主」信仰の要素があるエリート主義思想に着目した。サン＝シモン主義は、19世紀のヨーロッパに広範な影響力を

与え、ロシアにも大きな影響力を与えた。目覚めた知識人エリートの指導による革命という思想は、レーニンの思想の母胎となった。マルクスには、レーニンのような指導者絶対の「前衛党」論はない。

サン＝シモン主義とフランス革命時のジャコバン派（ジャコバン独裁）の流れをくむロシア・ジャコバン派の思想の合体したものが、レーニン主義だった。この本は、「社会主義とは何か」というよりも、ロシア革命を生んだ思想は何か、ということをはっきりとしようとしたものである。出版した1991年12月は、ソ連という国家形態が消失した（11の共和国による独立国家共同体（CIS）成立）ときだった。偶然とはいえ、タイムリーな本なのだが、日本ではさほど注目されなかった。後に講談社学術文庫の目利きの編集者が注目してくれて、学術文庫版が出せたのがうれしかった。

ただ今村仁司教授が、「毎日新聞」紙上で後世に残る仕事だと評価してくれた。まだ存命だった、独自のロシア革命論を書かれた松田道雄先生も、高く評価してくれたことが記憶に残っている。個人的には、今もなお誇っていい仕事だと思っている。

★書評：

今村仁司「社会主義観の変更へ重大提言」『毎日新聞』1992年1月27日付

橋爪大三郎「世界を支配した『産業主義』」『日本経済新聞』1992年2月2日付

佐伯啓思「佐伯啓思が読む・『メシアニズムの終焉』」『産経新聞』1992年3月27日号

田崎英明「知識層の問題を鍵に」『週刊読書人』1992年3月2日号

坂内仁「ボリシェヴィズムの意外な源流」『図書新聞』1992年3月14日号

川原彰「〈社会主義の敗北、資本主義の勝利〉の不毛性」『エコノミスト』1992年6月9日号

天野恵一「メシアニズムの終焉」『情況』1992年7/8月合併号

9、『ボーダーレス化社会——ことばが失われたあとで』（新曜社、1992年）

『家族のミトロジー』を出してくれた編集者からの依頼で、1980年代にあちこちの新聞、雑誌に書いてきた批評文をまとめた。この本のなかに、80年代のバブルの時代の狂騒がうかがえる。また、『ユリイカ』の村上春樹特集に書いた「ノルウェーの森」論などの村上春樹論を三本まとめて、「村上春樹の80年代」という論考にした。あとは、手塚治虫論が2本、それに24時間オープンのコンビニが出てきて東京の都市空間が変貌する状況を論じた「眠らない都市の誕生」（雑誌『東京人』掲載）などが収録された。

この本の序文で「もう、この国にはかつてのような安定した『枠』は、どこにも存在しない」と書いた。「経済もバブルだったが、文化のほうもバブルだった。（略）枠や境界の崩壊は、規範の崩壊でもあった。居直りと無責任の時代」と結んだのだが、悲しいことに今の時代も同じような言葉で表現できるだろう。

自著解題

★書評：

中島梓「『80年代とは……』中間色の時代」『産経新聞』1993年2月9日付

評者名なし「崩壊する家や風俗読み解く」共同通信配信：『下野新聞』1月11日付ほか。

武田徹「80年代的現実のゆくえ」『図書新聞』1993年1月23日号

評者（健）「ボーダーレス化社会」『毎日新聞』1993年2月15日付

短評：『読売新聞』1993年1月4日付

10、『可能性としての「戦後」』（講談社選書メチエ，1994年／増補版平凡社ライブラリー，2007年）

講談社新書のW部長が、学術局長になって、「講談社選書メチエ」というシリーズを始めることになった。きみも日本の戦後史について一冊書けと言われて、あまり論じられてこなかった在野の知識人にピントをあてて、戦後日本社会の出発を書こうと思った。

当時はまったく忘れ去られていた、作家の獅子文六（今や、ちくま文庫で次々と作品が復刻されて人気がある）の戦後女性を描いた「自由学校」を論じ、地方の村のボスたちによる政治支配をユーモラスに告発した杉浦明平のノンフィクション、京都の町医者でありながらも、戦後の小児科医学を先導した松田道雄の育児書、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん（2016、高畑充希主演）」で若い世代にも知られるようになった『暮らしの手帖』の花森安治（ドラマでは唐沢寿明が演じた）の批評活動などを論じた。

戦後知識人批判がブームとなっていて、編集者（学術局長）は、戦後啓蒙主義知識人を批判的に論じた本を期待していたのだが、私は、戦後が何から人々を解放したのか、何が最大の遺産なのか、についてを論じたかった。マイナスではなく、あえて何がプラスだったのか。そこにこそ論ずべき問題があると思った。できあがった原稿をめぐって、W学術局長と議論して、長文の手紙のやりとりなどしたが、節を曲げず、そのまま押し通した。長年にわたる付き合いのある編集者Wさんとの初めての意見の衝突で、彼とは気まずくなって、しばらく連絡しないままだった。担当になっていた若手の編集者が、間になって困っていたことをおぼえている。

★書評：

小池民男「現場から〈解放〉〈兵隊〉……の視線貫く」『朝日新聞』1994年3月20日付

山野博史「現場検証の中から戦後を問う」『現代』1994年4月号

永井良和「戦後の日本人の思想形成解説」『週刊ポスト』1994年6月10日号

鈴木 正「よりよき戦後を望んで」『図書新聞』1994年5月21日号

短評：『日本経済新聞』1994年2月13日付、『毎日新聞』1994年3月14日付、『週刊現代』

1994年2月26日号

奥谷禮子「可能性としての戦後」『商工クラブ』1995年1月号

佐藤健二「桜井哲夫著『可能性としての「戦後」』, 『東京経大会誌』196号(1996年3月)

11、『TV 魔法のメディア』(ちくま新書, 1994年)

コミュニケーション学部が発足(1995年)することになって、私も経済学部から移籍することになった。その際に、君は映像に詳しいからという理由で「テレビ文化論」という講義を割り当てられてしまった。テレビ文化論なる講義の担当者でありながら、著作もないのはおかしいな、と思って、当時声をかけてくれた筑摩書房の編集者に企画を持ち込んで、新書になったものだ。

テレビの歴史と、テレビが引き起こしてきた騒動の分析がメインだが、とにかくテレビの映像データは1970年代前半まではほとんど残っていないのだから、雑誌資料などで補強するほかなかった。その当時高額なビデオテープは、次々と重ね取りするので、映像が資料として残らないのだ。残っているのは、外部の映画会社が保存したものくらいである。テレビ研究が盛んにならないのは当たり前だった。すべて映像資料が残っている米国との大きな違いであり、結局日本ではテレビ研究は主流とならず、あっという間に、ネットメディアの研究に取って代わられてしまった。

★書評・インタビュー：

評者名なし：共同通信配信「風俗や思想 多面的分析」『信濃毎日新聞』1994年12月11日付、

「風俗と思想交え幅広く分析」『下野新聞』1994年12月24日付ほか。

インタビュー「著者訪問・テレビの特質綿密に検討」『北海道新聞』1995年1月8日付

12、『フーコー——知と権力(現代思想の冒険者たち)』(講談社, 1996年)／(新装セレクト版, 講談社, 2003年)

また例の講談社学術局長が、今村仁司教授、三島憲一教授らを担ぎ出して、「現代思想の冒険者たち」という20世紀思想を総括するシリーズ(全31巻)を企画した。コミュニケーション学部が発足してまもなくのころ(1995年)、シリーズの中の「フーコー」(第2回配本予定)を担当してくれないか、と今村教授から話がきた。どうして私に、と思ったのだが、依頼されて断ったことがない私としては、引き受けることにした。

それまで、ミシェル・フーコーに関する翻訳、書籍については、東大の仏文系が、囲い込んで独占するような感じだった。そこに院生のころからずっと読み続けて影響を受けていたとはいえ、フーコー論を書いたことのない私が書くわけだから、やや身構えて執筆活動に入った。

それまでのフーコーの著作の翻訳のほとんどは、はっきり言って理解しにくい、というよ

自著解題

り訳している本人が内容を正確に理解していないのではないか、と思われる悪文の翻訳文だった。だから、引用する文章は、既存の翻訳を一切使わず、すべて自分で訳することにした。できるだけ徹底的にわかりやすく、フーコーの思想を解説する本にすることに決めていた。難解な漢字を使って、人を煙に巻くようなフーコー論ばかりで、これが分からない奴はバカだというたぐいの文章に辟易していたからである。

出版されたあと、値段の高い本（定価 2600 円）なのに売れていると言われて驚いた。確かに重版がぞくぞくかかって、2001 年までに 7 刷までいって、2 万部近く売れた。その後廉価なセレクト版（2003）が出て、これも重版が続いた。フーコーのインタビューなどを手がけた辣腕の編集者として知られた書評家の安原顕氏に「講談本を読むようなおもしろさで一気に読める」「仏文系の研究者が絶対に書き得なかった」と評されて喜んだことをおぼえている。さらに、文芸批評家の三浦雅士氏には「私にはエリボンのフーコー伝よりも面白かった」と書かれた。なお、2001 年に中国の河北教育出版社から、中国語版『福柯』が出版されている。著書の外国語版が出たのはうれしかった。

★書評・インタビュー：

インタビュー・紹介記事「フーコーをとらえ直す—生涯と思想の生成過程追う」『日本経済新聞』1996 年 7 月 14 日付

安原顕「長年の欲求不満が解消された。講談本のように面白い哲学解説書」『図書新聞』1996 年 7 月 6 日号

同「新刊 私の◎○」『朝日新聞』1996 年 8 月 4 日付

三浦雅士「完結後 20 世紀の思想史はさらに見晴らしが増すだろう」『週刊朝日』1996 年 9 月 6 日号

(雅)「フーコー 知と権力」『毎日新聞』1996 年 9 月 23 日付

松葉祥一「主体概念をいかに発明するか」『図書新聞』1996 年 10 月 5 日付

13、『不良少年』（ちくま新書、1997 年）

『TV 魔法のメディア』の担当編集者と組んで書いた一冊。「不良」とは何だろうか、という疑問から始まった。この時期、「不良少年入門」といった本が出たりしていた。不良が輝かしいもののようにされるのはなぜか、と言えば「正常」と「異常」という振り分けが、近代的学校制度の形成から始まったからなのである。学校制度になじまない者が「不良」、のちに「非行少年」と分類された。学校制度からたたき出される側からすれば、不良は、一種の反抗的ヒーローである。

この本を書こうと思ったのは、『手塚治虫』（1990）を書いたときに、パーティで「少年マガジン」編集長の五十嵐隆夫氏（後に講談社専務）と知りあったからだ。五十嵐氏は、かつて赤塚不二夫の担当編集者として有名で、赤塚のマンガに「五十嵐記者」として出てくる

(小学館代表が「武居記者」)。五十嵐氏に、マガジン読んでいますか、と聞かれて、最近は何も読んでいません、と答えたら、翌週から「マガジン」が毎週送られてくるようになった(10年以上送られ続けてきた)。そこで60年代からの伝統のためか、「カメレオン」や「特攻の拓」といった不良少年マンガに人気があることに気がついたのである。この本では、「不良少年」を扱った映画やマンガもまとめたので、サブカルチャー史の上でも貴重かも知れない。

★書評：

芹沢俊介「〈理由なき反抗〉の変遷探る」『日本経済新聞』1997年11月23日付

評者名なし・共同通信配信書評「パラダイム喪失社会で漂流」『下野新聞』11月29日付、
「時代の断面としての若者像」『熊本日日新聞』11月23日付ほか。

評者名なし・時事通信配信：「避難所のない学校社会」『茨城新聞』11月12日付ほか。

斎藤美奈子「90年代不良少年の困難さ」『朝日新聞』10月27日夕刊。

永江朗「本屋さんで探し・93回」『週刊新刊全点案内』11月11日号

評者名(川)：『毎日新聞』11月9日付。

宮崎哲弥「解体「新書」・不良少年」『諸君!』1998年1月号

14、『〈自己責任〉とは何か』(講談社現代新書、1998年)

1996年4月から朝日新聞社の書評委員(1998年3月まで)に就任した。月1回築地の朝日新聞本社に通って、書評委員会に出席し、書評対象の本選びをしていた。せっせと月2回は書いたもので、この2年間の書評委員の中では、最多の書評数だったと思う。

さらに、1996年12月から共同通信社の地方紙へ配信する「論壇時評」を執筆することになった(「展望'97」, 1997年11月まで)。毎月、共同通信社から山のように論評対象の多くの雑誌が自宅に降り注いだ。しかもこの時期、大学では96年4月から執行部役職の研究委員長にされてしまい、会議に追われていた(98年3月まで)。そういえばこの頃、早稲田大法学部の非常勤講師までやっていたのだ。これでよく書き下ろしの『不良少年』が出せたものだと思う。まだ40代後半だったから、なんとか持ちこたえたのだろう。

そんなこんなで、共同通信の時評が終わりになるころ、また『不良少年』の刊行月の1997年10月に、講談社現代新書の新しい部長と前からの知り合いの若手編集者が、そろって大学までやってきた。いま、「自己責任」という妙な言葉がはやっているのだが、これをテーマに本を書いてもらえないか、というのである。ほぼ1年間「論壇時評」をやっていたので、社会情勢分析ならやれるだろうと思い、引き受けた。とにかく忙しい時期だったので、翌年夏くらいまでに原稿を仕上げればいいのだろう、と勝手に思い込んでしまった(来たときは原稿の締め切りについて話はなかったと思うのだが)。

そんなこんなで年が明けた。元旦に年賀状を読んでいると、現代新書の編集者からの年賀状があった。読むと、「原稿は順調でしょうか、刊行は5月に決まりました」とある。ビッ

自著解題

クリ仰天。資料集めやノート作りはしていたが、まだ1行も書いていない。おとそ気分は吹っ飛んだ。連絡を入れると「早く出すことになった、なんとか3月までにあげてください」とも言う。論壇時評は終わったが、書評委員も研究委員長もまだ終わっていない。今思い返しても、こんなに必死に毎日原稿を書いた事はない。

なんとか必死で3月末に原稿をあげて、無事5月に刊行された（これも最大手の講談社だから出来る早業だった）。出ると大きな反響が出て、あっという間にベストセラーになった。あちこちでインタビュー記事も出た。その後、2004年に再度ブームとなったのは、イラクでの日本人人質事件の際に、危険なところに勝手に行ったのだから、自己責任だという議論が起こったからである。「自己責任」とググると私の著書が一番最初に出てくるので、重版が続き、結局、全部あわせて10万部近く売れた。

さらに、2018年にシリアにとらわれていた安田純平さんが解放された時に、また「自己責任」バッシングが起こった。『毎日新聞』（10月28日付）と『朝日新聞』（12月27日付）にインタビュー記事が出た。

★書評・インタビュー：

橋爪大三郎「弱者への責任押しつけに抗議」『日本経済新聞』1998年7月5日付

評者名なし「言葉を疑うことの必要性を改めて実感」『金融経済新聞』6月22日付

川人博「いま人権を読む・自己責任とは何か？」『週刊新刊全点案内』6月30日号

宮崎哲弥「解体新書・自己責任とは何か」『諸君！』1998年8月号

評者名なし「責任をめぐって日本を考える」『経済セミナー』1998年8月号

矢口進也「言葉から現代を透視」『ポリマーダイジェスト』1998年7月号

著者インタビュー「横行する自己責任論は官僚・政治家のための身勝手な論理だ」『週刊現代』1998年7月4日号

インタビュー「自己責任という名の妖怪」『酪農事情』1998年7月号

インタビュー「規制緩和や自由競争は本当にいい社会をもたらすのか、冷静に考えるべき時期がきている」『B-ing』（リクルート）1998年8月11日・18日号

竹中平蔵「書棚から～柔軟かつ正統に考える」『朝日新聞』1998年9月20日号

短評：『週刊文春』1998年6月11日号

米原万里「自己責任、創価学会、ラスプーチン」『週刊文春』2004年5月20日号

15、『戦争の世紀——第一次世界大戦と精神の危機』（平凡社新書、1999年）

書評委員も、役職も終わって、『〈自己責任〉とは何か』も出せて、ほっと一息ついている頃に、『サン・イヴ街からの眺め』の編集者だったSさんから連絡がきた。岩波書店をやめた後、平凡社に入社していた。彼は、日本史ばかりの書籍になっている「平凡社選書」を立て直すので、ついでにヨーロッパの歴史や思想をテーマに一冊書き下ろしてほしい、という。

それなら、学生時代からずっと追いつけている第一次世界大戦をテーマに書くことにしよう
 と思い、集めていた資料や研究書を読みながら、執筆していた。

書き上げて、原稿を渡すことになった。するとSさんは、平凡社新書を立ち上げるこ
 になって初代編集長になっていた。そこで、これを新書に使わせてもらえないか、と言う。
 しかし、選書（単行本）のつもりなので、すべて使用した文献資料を（註）として入れてあ
 る。だから一般書向きとも思えない。文献一覧を最後に入れて、中はページ数を入れれば大
 丈夫と言われて、結局、新書のスタイルではないまま刊行してしまった。したがって、以後
 の二作品も、このスタイルで書くことになった。

★書評：

評者（川）：『毎日新聞』1999年12月2日付

今村仁司「一次大戦後の精神危機描く」『信濃毎日新聞』2000年1月9日付

絳秀美「第一次世界大戦の重要性」『Voice』2000年2月号

川本三郎「平成百色眼鏡」『SAPIO』（小学館）2000年1月12日号

中条省平「『戦争の世紀』20世紀の終末に3つの戦争論が出揃った」『論座』2000年3/4
 月号

安原顕「安原顕のカルチャー三昧」『アサヒグラフ』2000年1月28日号

短評：『東京新聞』2000年1月9日付。

16、『フーコー（知の教科書）』（講談社選書メチエ、2001年）

『〈自己責任〉とは何か』の担当編集者だったHさんから、選書メチエで「知の教科書」
 シリーズを始めるので、フーコーで一冊書いて下さいという依頼が来た。フーコーについて
 は、すでに前の本で書き尽くした感があったので、正直のところ、依頼に応じるかどうか、
 最後まで迷った。しかし、高校生が読めるような思想の本を書いて下さい、と言われて自由
 なスタイルで書くことに決めた。刊行されるとよく読まれたようで、7刷（2008年）まで増
 刷された。

17、『アメリカはなぜ嫌われるのか』（ちくま新書2002年）

『フーコー（知の教科書）』（2001年5月刊）執筆をしていたころのことである。2000年春
 に国際交流基金に依頼されて、その年の10月に開催された日独のシンポジウム「変容する
 若者文化」の基調講演（「若者文化の形成とその変容 —1970年代以降の日本社会と若者た
 ち」, ケルン日本文化会館, 2000年10月20日）のために、ドイツに10日間ほど滞在する
 ことになった。基調講演のあと、さらに二つの大学（国立トリアー大学, 国立エアランゲン
 =ニュルンベルク大学）の日本語学科で講演をした。成田からドイツのフランクフルト空港
 を経てケルンのホテルに到着し、テレビをつけたら、なんとアニメの「セーラームーン」が

自著解題

放送されていてビックリ仰天した。まさか、お堅いドイツで日本アニメ？ 翌日街にでると、いたるところにポケモングッズがあった。

春に大学には国際交流基金からの依頼状をつけて出国を申請していた。講義期間ではあったが、承認されていた。ところが、ドイツ出発直前の教授会で、そのころ突然任期終了前に辞職した学部長の後釜を選ぶ選挙が行われて、翌年3月までの穴埋め学部長に選ばれたのである。寝耳に水とはこのことで、驚いたままドイツに行き、帰ってきた直後からドタバタ騒ぎで、日々仕事があり、あちこちの会議に振り回された。このとき出回り始めていた携帯電話（学部長用、理事も兼任）をもたされ、初めて携帯との付き合いが始まった。

実は、この「アメリカ」本は、2000年春に、新しいちくま新書の編集長と会ったときに、こちらから申し出て書くことになっていた本である。『フーコー』のほうが終わったら、すぐにとりかかる筈だった。ところが、ドイツに行き、学部長になり、仕事にとりかかれずじまいだった。

やっと3月で学部長が終わり、4月からようやく自由になって、書き始められた。こうして2002年3月になんとか刊行できたのである。グローバリゼーションの本家の「アメリカ」とはいかなる原理の国なのか、ヨーロッパの思想家からアメリカはどのように見られてきたのか、日米関係の根底にある「愛憎」関係とは何か、などがテーマだった。

★書評：

今村仁司「単細胞文明の神話と現実」『信濃毎日新聞』2002年5月12日付

評者名なし「米国原理主義とどう付き合うか」『公明新聞』4月29日付

宇波彰「アメリカはなぜ嫌われるのか」ネット書店『BK1』4月25日付

短評：『毎日新聞』2002年5月25日付、『朝日新聞』4月7日付、『週刊東洋経済』4月20日号

紹介記事：藤原帰一「論壇時評・アメリカ」『朝日新聞』4月30日付

18、『「戦間期」の思想家たち——レヴィ＝ストロース・ブルトン・バタイユ』（平凡社新書，2004年）

さて、2002年3月に出した『アメリカ』本の原稿を出して、2001年の年末に腰痛があり、年明けに整形外科で痛み止め注射をした。確か1月6日ころ、お風呂に入っていて、すさまじい激痛に襲われた。ほうほうの体で抜け出したが、痛くて動けなくなった。翌日、激痛のはしるまま、整形外科に行くと、「はい、椎間板ヘルニアです。2週間くらいは、安静にして動かないで下さい」と宣言された。

ほんとうにトイレにさえ這ってゆくありさまで、2週間寝込んでいた。大学は、期末だったが、講義やゼミは、それまで休講していなかったので、二週間くらいは休講可能で助かった。寝たまま、ゲラの校正をおこない、やっと起き上がれるようになった。春休み中は、ほ

とんど毎日のようにリハビリに通った。

半年くらいは、時間があればリハビリに通わざるを得ず、執筆どころではなかった。そして、その夏に、『戦争の世紀』の続編となる『「戦間期」の思想家たち』を書き始めている。ところが、第一章を書いたところで、中断せざるを得なくなった。一つは、今村さんからの依頼（というより上司からの命令）で、岩波書店から出す『岩波社会思想事典』（今村仁司・三島憲一・川崎修編）の項目をたくさん引き受けざるを得なかったのである。もともと担当項目は多かったのに、ほかの人がダメだとこちらにまわってきた。編者でもないのに、結局19項目も執筆した。しかも2003年末に出すから、2002年内に提出というので、けっこう無理を重ね、書き下ろしは中断してしまった（結局、原稿が遅い人や、出版社側の都合で、刊行されたのは、2008年3月だった）。そういえば、今村さん編集の『現代思想を読む事典』（講談社、1988年）のときは、事項18項目、人名12項目を担当した。なにせ、「上司」（本人がそう言っていた）からの命令だから拒否できないのである。

さらに、夏休み後半ころか、香港中文大学のゴードン・マシューズ（Gordon Mathews）教授（文化人類学）から、日本の若者をテーマにして、論文集を作るので寄稿して欲しいとメールが来た。イギリスの出版社に企画書を出すというので、乗り気になって引き受けた。

最初は、自分で英文論文を書くつもりだった。準備をしていたのだが、突然あちらから、企画がすぐ通って、イギリスのRoutledgeから出せるので、原稿を2ヵ月くらいであげてくれ、と連絡が入った。ほかの予定もあるので、急には無理だと言うと、ならば、日本語で書いてくれれば、英訳者に頼むからと言われ、あわてて論文を書いて送ると、しばらくして、英語訳が出てきたので、その修正をして、送った。すると、その原稿を読んだ英国の出版社の編集者が、おもしろいのもっとページ数をやるから詳しく書いてくれと言ってきたらしい。そこで、追加の部分は自分で英文を書いて送った。それが、「Japan's changing generations -Are young people creating a new society?」(edited by Gordon Mathews, Bruce White, Routledge, 2004)の第一章(chap.1) [The generation gap in Japanese society since 1960s]である。ペーパーバック版(2006)も出されたので、一定の評価を得たと思う（邦訳は、『若者は日本を変えるか 世代間断絶の社会学』、小谷敏監訳、川畑博臣訳、世界思想社、2010年。翻訳は英文そのものからの翻訳なので、私は関わっていない）。

過去に書いてきた若者論をまとめたものだが、あえて新しい世代が、閉鎖的な年長世代を乗り越えるだろうという肯定的な結論を書いた。若者については、引きこもりなど悲観的な議論ばかりが多かったので、あえてこれまでの私の議論とは異なり、ネット文化の勃興とつなげて、将来への期待をこめて肯定的な結論を書いた。日本人執筆者は、おおむね若者に悲観的なのだが、外国人執筆者のほうは、若者たちが日本的規範から逸脱しはじめていることを指摘していて、この対比もおもしろい。

それやこれやで、『戦間期の思想家たち』の執筆を再開したのは、2003年春のことであり、

自著解題

12月に脱稿して、翌年3月に刊行できた。これは、両大戦間期のヨーロッパ（特にフランス）の若い思想家、文学者、政治家たちの群像劇であって、特定の主人公はいない。時代の波に揺られ、右へ左へと動く群像を描いてみたかったのだ。

★書評：

中条省平「第一次大戦後の仏知識人の動向を検証」『朝日新聞』2004年5月9日付

塚原 史「個性的な語り口で 危機の時代の知のヒーローたちを論じる」『週刊読書人』2004年6月4日号

加藤哲郎「歴史書の棚・ナチスをくぐり抜けた人々」『エコノミスト』2004年5月25日号

短評：『東京新聞』2004年5月23日付，時事通信配信『十勝毎日新聞』2004年4月17日付，『茨城新聞』4月18日付，『陸奥新聞』4月18日付

19、『占領下バリの思想家たち——収容所と亡命の時代』（平凡社新書，2007年）

『戦間期の思想家たち』を出したあと、編集者のSさんから、学生むけの教科書を作ってみないかと誘われた。そこで、コミュニケーション学部の若い同僚の大榎淳さんと北山聡さんを誘って、ネット社会の入門書を作ることにした。各章ごとに序説を書いて、全部で45のキーワード解説でネット社会を考察するというものだったが、刊行が2005年1月に決まっているので、原稿も2004年秋にあげなければならず、大変だった。1人ならなんとでもなるのだけれども、3人分担ということになると、結局原稿を集めるのが大変で、間に合わないところはこちらが書かざるをえず、4割から5割弱書くことになった。それが『入門講座 デジタルネットワーク社会 —インターネット・ケータイ文化を展望する』（平凡社，2005）である。

『占領下……』が書けたのは、2006年4月から国内研究員として1年間の研究休暇をもらえたからである。この時期、父の自宅での介護問題もかなり深刻で大変だった。『占領下……』のあと、しばらく本が出せなかったのも、この介護の問題と今村さんの急死（2007年5月）のショックが大きかったためだ。この本が出て、日本経済新聞紙上（2007.2.11）で、哲学者の坂部恵東大名誉教授に好意的な書評を書いていただいて、うれしかったことを思いだす。坂部教授とは、以前に財団法人大学セミナーハウスの共同セミナー運営委員会（副委員長を7年ほどしていた）で一緒させていただいたことがあった。その坂部さんもこの書評を書かれた2年後の2009年に亡くなられた。

ひとまず、第一次世界大戦から二次世界大戦後までを三部作で書き上げて、ほっとすると同時に一種の脱力感が生じたのも事実である。この年の秋に、今村仁司教授の追悼シンポジウム「現代における社会と文化の理論を求めて」（2007.10.27）が東経大で実施され、私は、今村さんの「労働論」をまとめる講演「今村『労働論』の今日的意味」を担当した。講演するなかで、昔を思いだして思わず絶句して涙がながれて詰まってしまった。いささか恥ずか

しかったが、それほど長い付き合いだったということである。

★書評・インタビュー：

坂部 恵「戦争に翻弄された知識人の群像」『日本経済新聞』2007年2月11日付

長山靖生「沈黙し妥協し忘却してしまう人間の弱さ」『週刊朝日』2007年3月9日号

澤田 直「膨大な資料を渉猟し戦中期の知識人の姿をパノラマ風に描く」『週刊読書人』
2007年4月6日号

インタビュー・共同通信配信「本を語る：戦争をどう考えるか」『京都新聞』2007年2月25
日付、「戦争 気づくと巨大破局」『信濃毎日新聞』2007年2月11日付ほか。

インタビュー：「この人この本：大戦下の知識人たちを描く」『東京新聞』2007年2月25日
付

短評：『朝日新聞』2007年2月11日付

20、『今村仁司の社会哲学・入門一目覚めるために』（講談社、2011年）

今村仁司追悼シンポジウムを終えて、今村思想を概観する書物を書こうと思い立って、ノートを作り始めた。今村編『現代思想を読む事典』をたった一人で編集作業をした講談社のHさんに出して欲しいと頼み、了解を取り付けた。だが、この作業が遅々として進まなかった。父の介護があり、母が体調をくずすなど、身内の問題があって、執筆どころではなかったこともある。だが一番困難だったのは、今村さんの仕事の内容が多岐にわたり、どのようにまとめるべきなのか、定まらなかったからだ（著作は、増補改訂版含め38冊、単行本未収録の論文多数）。

そのうち、2008年初めに父が亡くなり、葬儀や整理があって、しばらくはその仕事に追われた。そうこうするうちに、母親も体調がわるくなってゆき、2010年初めに急逝してしまった。このため、執筆作業は中断し、書き上げられるのだろうか、と不安を感じた。Hさんにも部分的に出来上がった原稿を見てもらったが、「まだわかりにくい」と言われ、行き詰まりを感じた。急に原稿が進みはじめたのは、2010年の晩秋のころからだったろうか。原稿が進むようになり、翌2011年2月頃に脱稿できた。そして、原稿を渡したあと、3月11日に東日本大震災とそれに続く福島第一原発のメルトダウンが起こったのである。この本の「あとがき」の日付は、春のお彼岸の中日（3月21日）である。最後のところを一部だけ引用しておく。

「ようやく書き上げられた原稿を読み直しながら、今村死後の四年の間に、両親を含め筆者の周囲で亡くなった人々のことを思い起こす。思えば、今村を含め、これらの記憶のなかの『生ける死者』たちに支えられて本書を書き上げられたのではないのか、とも思う」。

21、『一遍と時衆の謎 一時宗史を読み解く』（平凡社新書，2014年）

東日本大震災と原発のメルトダウンのショックは大きかった。知人からの紹介で、原子力資料情報室などと同僚の教員などと協力して「暮らしの中の放射能」という YOUTUBE によるネット配信の映像番組制作に協力した。そうこうするうちに、2002年に父から引き継いだ生家の時宗寺院の住職としての自己を強く意識するようになった。震災で亡くなった方々を追悼する気持もこめて、中世社会の底辺の人々の中を布教してまわった一遍上人についてあらためて書きたいと思った。

時宗総本山遊行寺（神奈川県藤沢市）の教学研究所顧問も長らくつとめており、その関係で一遍や時宗をめぐる研究史をまとめたことがあった。そこで、この論考と寺の檀家の方々への「たより」で連載していた一遍上人の伝記を大幅に書き直してまとめることにした。平凡社のSさんは、定年退職していたが、その紹介のおかげで平凡社新書として出せることになった。私は、この本の「あとがき」に以下のように記した。

「大震災と未だに収束の見込みもたない未曾有の原発事故のあとで、過去の歴史を見つめ直すという作業は、現在の『われわれ』の未来の希望のためにこそ存在する。中世の濁世のなかで遍歴遊行した一遍と時衆の歴史をたどるといふ仕事の意味を、私はそこに見出したのだ。震災と原発事故から三年経って、はやくも経営者、政治家、官僚たちは、過去を忘れ去りたいかのような行動を見せはじめている。二万人近い震災の犠牲者と今も続く原発事故の被災者の惨状を忘れ去って、どこに未来があるのか。希望があるのか。死者たちの声を無視して、どこにこの国の将来があるのか」。

震災と事故から8年経つが、未だにこの言葉は、過去の言葉になりそうもない。

★書評・紹介：

短評：『朝日新聞』2014年11月23日付

短評：『在家佛教』2014年12月号

22、『廃墟の残響 一戦後漫画の原像』（NTT出版，2015年）

2011年3月11日の大震災の翌日12日（土曜日）に大学で、市民大学OBが組織する団体（樗友会）が主催する総会で講演を行う予定だった。2010年前期（3月～9月）のNHKの朝ドラ「ゲゲゲの女房」が大ヒットして、高齢者のファンも多かったのも、水木しげるを含めた日本マンガの話をすることにしていた。準備をしていたが、震災で自宅が停電し、電話も携帯も使えず、暖房も使えないまま一夜を過ごした。電車関係も不通（あとで聞くと大学にいた学生や教職員は、大学で一夜をすごしたとのこと）で、どうなるかわからないため、翌朝携帯がつながったあと、担当者に連絡をとって講演中止を伝えた。

その講演は、1年後の2012年3月に延期して行われたのだが、このときにいろいろと資料を集めて、おもしろい事実がわかってきたので、戦後の漫画史を書いてみようと思い始め

た。ひとまず学部の特別講義「戦後日本漫画史」を計画することにした。2013年度から2016年度まで4年間、「戦後漫画史」の講義を行い、その合間に資料を集め、2013年夏頃から執筆をし始めた。

ところが、『一遍と時衆の謎』のほうを書き始めてしまったので、一部を書いて仕事はストップした。最初は、『手塚治虫』を出した講談社で出せるかと思い、2014年春ころ、幹部社員（局長）になっていたHさんに頼んだ。だが、どうも関係部署の反応が鈍いらしく、あきらめることにした。そのころ（2014年秋）、岩波書店で今村さんの本の編集を任されていたSさんが、退職してNTT出版に移った際に久しぶりに出会った。そのときこの本の話をしたところ、興味を持ってくれたので、連絡をすると、やりたいと言う。

ところが、話を決めると、NTT出版は、出版予定を決めるとその日時を変えられないので、2015年3月刊行と決まったので、原稿は2014年末までに必ず仕上げてください、と言われた。半分くらいしか書き上げていなかったから、それからが大変だった。締め切りに追われる宿命は逃れられないようだった。

★書評：

浦辺 登「未来へ発した警告の重さ」『東京新聞』2015年4月19日付

細野晴臣「敗戦や原爆が喚起した想像力」『朝日新聞』2015年5月10日付

野上 暁「戦争を起点に人脈でたどった現代漫画史」『WEB RONZA』2015年5月28日付

辛 淑玉「マンガの向こうに寄り道の一冊～桜井哲夫の本」『月刊マスコミ市民』No.557 (2015年6月号)

紹介記事：「大波小波」『東京新聞』2015年4月28日夕刊

23、『一遍 捨聖の思想』（平凡社新書、2017年）

自著解題もラストとなった。この本は、書き始めてから、最初のプランが大きく変わった。最初は、時衆の歴史と『一遍上人語録』の解説をするはずだった。ところが、書いているうちに、日本の浄土教とは何か、ということを書かなければダメだと気づいた。そもそも浄土教はどこから生まれたのか、大乘仏教のなかでも浄土教は極めて異質である。どこから生まれたのかをきちんとわかりやすく説明している本は、ほとんど見たことがない。ならば、自分で「浄土教とは何か」をできるだけわかりやすく解説する本を書こうと思ったのである。

タイトルは、出版社の意向で『一遍 捨聖の思想』となったが、私のつけたタイトルは『浄土教のなかの一遍』であった。浄土教の歴史をきちんと整理していくことで、日本仏教史の中での一遍の立ち位置がはっきりと分かってくるのである。「日本経済新聞」や「東京新聞」の書評は、さすがにそこをきちんと受けとめてくれていて、ありがたかった。

自著解題

★書評・インタビュー：

中村圭志「『信』によらぬことが開く展望」『日本経済新聞』2017年9月16日付

釈徹宗「従軍し形見を届けた時衆」『東京新聞』2017年10月8日付

インタビュー「相次ぐ一遍上人研究本・人は生き直せる教え」『毎日新聞』2017年9月25日付夕刊

紹介記事「今こそ！ 一遍」『週刊仏教タイムス』2017年10月19日号

短評：『朝日新聞』2017年9月17日付，『読売新聞』2017年10月23日付夕刊

『週刊文春』10月19日号，時事通信配信『東奥日報』2017年10月25日付，『沖縄タイムス』10月22日付ほか。